

増谷先生をしのぶ

田丸徳善

昭和62年12月6日午前、増谷先生が静かに世を去られてから、早くも半年が過ぎようとしている。半年の月日をへだててみると、当初の衝撃はたしかに静まったものの、それだけ言いようのない寂しさが深まったようにも思える。私たち宗教学の恩師・先輩は、なぜか長命の方が余り多くない中で、増谷先生は最後までご健在の恩師の一人であった。その先生を失ったことは、かけがえのない損失というほかはない。

かつて先生は、昭和30年秋の日本宗教学会学術大会の際、「姉崎正治の業績」と題して講演し、その師の学問について語られたことがある（『宗教研究』147号所載）。それは、わが国における原始仏教の研究に大きな足跡を残した師の業績を、冷静な目で、しかも敬愛の念をこめて、跡づけたものであった。先生の仕事の最も重要な部分は、こうした師の研究を忠実に継承かつ展開するところにあったと言ってよいであろう。

学者としての先生のこれらの業績や、わが国の宗教研究の流れの中でのその意義については、いづれ本格的な形で取り上げる必要があることは、言うまでもない。事実、何人かの方は、短い形ながら、すでにそのことに言及しておられる。ただ、ここでは、この問題は別の機会にゆずり、先生をめぐる二、三の個人的な想出のみを記すことをお許しいただきたい。

私が先生に初めてお会いしたのは、多分、昭和27年ごろ、講師として東大文学部にご出講になっ

た折であった。たまたま自宅にあった何冊かのご著書（『行誡上人』など）により、高い文名について承知していたとはいえ、先生にじかに接するのは、この時が最初であった。講義の内容は、たしか『仏教とキリスト教の比較研究』とほぼ同じものだったと記憶している。部厚いノートをめくりながら話されるその語り口には、独特のリズムがあった。もっとも、当時の私は必ずしも勤勉な学生ではなかったから、先生の注意をひいたことは、恐らくなかった筈である。

その後、学会の旅行などでご一緒したりしたこともあるが、より近く接する機会をもつようになったのは、何といても昭和36年、数年間の外国留学から戻ってからである。私はその年の4月から、大正大学で哲学・語学を担当する傍ら、(財)国際宗教研究所で働くこととなった。これは、当時としてはかなり恵まれた環境だったといわなければならない。もう一人の恩師、岸本先生が増谷先生とはかり、大正大学西洋哲学研究室の主任の佐藤教授に相談して、このポストを用意していただいたことは、後になってわかったことである。

その後しばらくの間、私は母校の東大宗教学研究室の助手になったこともあって、二人の恩師に接することが多かった。お二人がともに指導的な役割を果たしておられた国際宗教研究所の仕事も、自然とそのような機会を多くした。そうした経験から、ことに印象的であったのは、お二人が実に親密な友情で結ばれているようにみえたことであ

る。ほぼ同じ世代に属し、それぞれに強い個性をもち、したがってまた、ある意味ではよきライバルでもあった古野、増谷、石津、岸本、大畠の諸先生の中で、この関係は特別のものごとくであった。私はこれら諸先生すべてと、深淺の差はあれ個人的に接する幸運にめぐまれたが、中でもお二人のこの友情と信頼とは殆ど羨ましいばかりに思われた。

考えてみると私は、前記の学生時代を除けば、増谷先生から教室で教えを受けたことはなかった。所属の上でより近いのは岸本、大畠の両先生であったし、また必ずしも原始仏教を専門としなかったことから、その点で先生の直接の指導を頂いたこともない。にも拘らず、先生から学んだものは少なくない。それは、いわば学問に取り組む姿勢といった、より基本的なものに関係しているのではないかと思う。例えば、こと文章に関しては、先生はきびしかった。一字一句をゆるがせにしないということを、私は先生から徹底して教えられた。これは、「文は人なり」と言われた姉崎先生いらい、宗教学科の伝統でもあったのである。

先生と私との間には、さらにある共通点があった。先生は、人も知るごとく九州の浄土宗寺院のご出身であるが、その跡を継がれず、生涯を自由な学徒として、研究と著作に専念された。なぜそのような道を選ばれたかについて、先生はついで自ら語られたことはなかったし、私もあえてお尋ねしたことはない。しかしこのことが、自分も同じような境遇にある私にとって、ある種の親近感を抱く根拠になったことは確かである。昭和40年、結婚にさいして、いわば「戒師」にあたる役目をお願いしたのも、一つはそのような多分に勝手な思い込みからであった。先生はこの頼みを快く引き受け、原始教典の一節を選んで記念のアルバムに書き記してくださった。

もう一つ、先生において際立っていたのは、自分にとって本質的でないものを、容赦なく切り捨てるといふ潔癖さではなかったかと思う。例えば、学会の事務的な会合とか、同窓の集いといった場合にも、いわゆる付き合いで顔をだされることは滅多になかった。こうした傾向は、昭和48年に古稀を迎えられ、現役を退かれてからことに著しく

なったようである。もっともこれは、健康も一因であったに違いない。先生は年とともに次第に難聴ぎみになられ、お宅に参上しても、奥様の通訳なしにはなかなか話しが通じないことが多くなった。こうして晩年の先生は、公けの職務をすべて辞退し、ついにはNHKでの講演も断られて、さながら隠者のごとき生活にはいられたのである。

今にして思えば心残りの種ではあるが、最後の数年、お目にかかる機会は数えるほどしかなかった。昭和58年7月1日、著作集の完結を祝って、ごく親しい弟子15名ばかりがご夫妻を囲んで集まったのが、この種の集いとしては、恐らく最後ではなかったろうか。その時の先生は心から喜びなご様子にみえ、さまざまな想出とともに、また今後のお仕事の構想などを話してくださった。しかしその後、一つにはさまざまな用務に追われていたのと、また一つには先生の静かな生活のリズムを乱すのではないかという懸念から、気にはかかりながらも、お訪ねすることは稀であった。

先生の亡くなられた12月6日は、ひどく寒かった。早朝からの雨が雪になり、それが歩行を妨げるほど積もったところもあった。数か月まえから病状を伺っていたので、覚悟はしていたものの、その報せはやはりショックであった。取り急ぎその夕刻、大正大学の石上教授、淑徳学園高校の大橋校長とともにお宅に参上し、ご遺族といろいろな手筈の打ち合せなどをおこなった。遺言により、戒名はいらないということだったので、石上氏が白木の位牌に「故増谷文雄位」と書いて、三人でかんたんな枕経を勤めさせていただいた。居合わせたのはご遺族、在家仏教協会の内藤氏、真如苑の関係者など、ごく少数にすぎなかった。また、ふつうの葬儀の代わりに、「念仏一会」を勤めてほしいとの生前のご意向にそって、12月19日、増上寺の安国殿（黒本尊）でお別れの式がおこなわれた。いかにも先生にふさわしい、簡素ながら、心のこもったものであった。

ご生前の先生は私にとって、たとい離れていても、どこかにそのきびしく、しかも慈愛のこもった眼差しを感じないではいられないような存在であった。このことは、もはやお会いするすべもなくなくなった今後、変わることはないであろう。